

<『昭和史』半藤一利著>

著者に聞く 1

<『昭和史』半藤一利著>

2004年と06年に単行本として刊行され、ベストセラーとなった半藤一利さんの『昭和史』。このほど、新たに講演録を増補し、文庫本サイズとなって出版されました。刊行のきっかけ、昭和史の見方について半藤さんに聞きました。

——文体は語り調で、随所に人物や日記などが登場し、エピソードもふんだんに盛り込まれています。昭和史でとかく分かりにくい「戦前・戦中」も読みやすいですね。刊行されたきっかけは何ですか。

◆昭和史が教えられていない

平凡社の編集者から「学校では昭和史をほとんど習わなかったの、知らないことばかり。分かりやすい手ほどきの授業をしていただけたら」といわれたんです。初めは乗り気じゃなかった。「そんな簡単には喋れない」と断っていたんですが、編集者から「日本の明日のためにもなるのですが」と食い下がられ、引き受けることにしたんです。

それに加え、実はわたし、文藝春秋を辞める頃に、ある女子大に頼まれて3ヶ月半ぐらい講師をやったことがあるんです。国際情報学部といったかな、その3年生の女子大生50人にジャーナリズム論を教えました。そこで、「太平洋戦争」に関するアンケートをとったことがあるんです。「日本と戦争をしなかった国はどこですか」との質問に、「アメリカ、ドイツ、カナダ、豪州」から選んでもらったところ、アメリカに○をつけた学生が50人中12人いたんですよ。ふざけているのかと思ったので聞いたら「いえ、まじめにやりました」と。「ほんとにアメリカと戦争しなかったと思っているの」と尋ねると「はい」という。驚きでしたね。そしたら、手をあげてくる学生がいた。「それ、どっちが勝ったんですか」というんですよ。これには、さすがに、ぼくもひっくり返った。いくら昭和史が教えられていないからといって、あんまりだ。その体験があったので、仕事として残しておいた方がいいのかなという思いもあって、引き受けることにしたんです。

生徒は編集者を含め4人。このうち30代が3人。寺子屋の授業といった雰囲気です。毎月一回、テーマを決めて1時間半ぐらい喋りました。授業では質問などは一切受けませんでした。質問は話が終わってから、というスタイルで進めました。

——「戦前・戦中編」の「昭和がダメになったスタートの満州事変」のなかで、奉天(現中国・瀋陽)で当時、関東軍参謀だった板垣征四郎たちが酒を飲みながら、柳条湖付近の鉄道爆破計画を「協議」している場面があります。人間模様が生々しいですね。軍事国家へひた走る国の姿を作家たちはどうみていたのか、永井荷風の日記「断腸亭日乗」も随所に出てきます。新聞記事なども入れて幅をもたせてありますね。

◆人間を通して歴史をみていく

歴史の基本は人間学だと思っています。人間というものをどう描くか、人間を通して歴史をどうみていくかという考えで取り組んでいます。ですから、満州事変を定義するよりも先に当時、陸軍中佐の石原莞爾とはどういう男か、板垣征四郎とはどのような人物だったのか、そっちの方から先に話すようにしました。そうしないと、聞いている方も飽きてしまいます。

著者に聞く 2

<『昭和史』半藤一利著>

——城山三郎さんの著書『落日燃ゆ』では広田弘毅元総理・外相は「善人」として描かれています。この本から受けるイメージでは「悪人」ですね。海軍にしてもそう。山本五十六、米内光政、井上成美といった海軍の3人の最高幹部に対しても、この本ではいくらかは冷ややかに語られています。

◆歴史は見方によって随分違う

一方的な見方をしたくないので、できるだけ公平にしたいと心掛けています。『落日燃ゆ』を読んだときは、こういう書き方をしたら歴史を見誤るなと思いました。広田内閣(1936年3月～37年2月)では、「軍部大臣現役武官制」(現役の軍人でなければ陸軍大臣、海軍大臣になれない制度)が敷かれ、日本とドイツが「防共協定」を結び、陸軍の統制派、エリートの幕僚グループが海軍の軍令部と相談し、その後の「国策の基準」を決めました。さらに、「不穏文書取締法」をつくり言論弾圧をしました。しかも、そのあとの近衛内閣で、広田弘毅は外務大臣として日本の外交の総大将として日中戦争に関わっているんです。その責任はあると思いますよ。

ところが、『落日燃ゆ』では「潔さ」をテーマに書かれています。東京裁判での「一切、語らず」は広く知られていますが、「潔さ」と政治責任とはちょっと違うんじゃないかと思えますね。海軍にしてもしかり。山本五十六、米内光政、井上成美などは「善玉」とし

で受け取られています、完全にそうかなと思いますね。歴史は見方によって随分違います。ただ、やったことはやったと、いうべきことはいわないといけないと思う。

——「戦後編」では文藝春秋社に入社し、編集部員として目撃したことなどが記されていますね。石原慎太郎・現東京都知事が『太陽の季節』(1956年)で芥川賞を受賞した際、選考委員のなかで評価が割れ、大激論が交わされたその場にいたんですね。55年秋、ホンダ創業者・本田宗一郎の苦勞談話を「文藝春秋」に「バタバタ暮らしのアロハ社長」のタイトルで掲載したところ、当の本人にいたく気に入られ、「お礼にうちの株をあげましょう」といわれて、断ったというエピソードも面白いですね。

◆ホンダの株はのちに数百倍？

『太陽の季節』を最後まで認めようとしなかったのが佐藤春夫。井上靖が「先生がおっしゃるほど悪い作品じゃないと思いますよ」というと、このひとことで、佐藤春夫は「きみもか」という顔をして芥川賞が決まったんです。それと、ホンダの話は、神楽坂で藤沢武夫専務も同席し、ごちそうになったんです。本田社長が「うちの株をやる」といつてきたので、興味もないし断ったら、随分、あとになってパーティーで「あんとき、断られたから株をあげなかったけれど、うちの株はあれから数百倍になったんだよ」といわれたことがありましたね(笑)。

1958年に皇太子妃が決まり、ミッチーブームで週刊誌が次々に創刊されました。59年に「週刊文春」が創刊されたときに、週刊誌に異動になったんですが、当時は連載小説がもっとも読まれていました。全盛の作家は松本清張ですよ。当時、サラリーマンの通勤圏が郊外へと広がっていた時代だったので、5ページぐらいの週刊誌の小説は通勤時に読むのにちょうどいい長さだったんです。

著者に聞く 3

<『昭和史』半藤一利著>

——「昭和史」でもっとも関心がある人物は誰ですか。

◆昭和は「特異な時代」という司馬遼太郎さん

今、ちょっと関心があるのは、司馬遼太郎さんですね。司馬さんは「昭和は日本の歴史のなかでは“異体”である。つまり、特異な時代だ」とおっしゃってます。生前、司馬さんと話し合ったときに、「それは、間違っています」といったことがあります。「日本人がつくってきた歴史として昭和があるわけで、昭和だけ、突然、違ったものができたわ

けではないですよ」と。そしたら、司馬さんは「いや、それは認められないな」といって
いました。これでは、昭和があまりにもかわいそうですよ。明治も昭和も繋がってきて
いる。『昭和史』ではそういうことも明らかにしておきたかった。敗戦までの20年間は
日本じゃないというのは、ちょっと違う。この本では、その点だけは丁寧に喋ったつもり
です。日本人が昭和を生きたから現代があるのであって、現代から明日の日本を考
えるためには、昭和の歴史をもっと丁寧にみないといけないんじゃないかと思ってい
ます。

【プロフィール&近況】



半藤一利(はんだう・かずとし)1930年、東京・向島(現・墨田区)生まれ。東京大学
文学部国文科卒業。1953年に文藝春秋入社。「週刊文春」「文藝春秋」編集長を経て、
出版局長、取締役専務などを経て94年に退社。執筆活動に専念する。『漱石先生ぞ
な、もし』で新田次郎文学賞、『ノモンハンの夏』で山本七平賞を受賞。『荷風さんの戦
後』、『幕末史』など著書多数。『昭和史』は毎日出版文化特別賞を受賞。現在、連載
を4本抱え、今月下旬に共著『占領下の日本』、8月上旬に共著『東京裁判』(仮題)を
刊行予定。

※

最近、「昭和史を学校できちんと教えろ」という声をよく耳にするという。「だけど、教
える先生がいません。きちんと昭和史を教えられる先生を養成しないと、この国はた
だごとではなくなってしまう」。講演はそんなに受けないが、「昭和史を高校生相手に
話すのであれば全部、受けます」。毎日、午後の2時から6時ごろまで机に向かう。
「夜は酒を飲むので仕事はしません」。

「昭和史」 半藤一利



半藤一利著

平凡社(512p)2004.02.10

1,680 円

昭和史というのは学校で教えてくれない。日本史の授業はたいてい明治維新前後で時間切れになってしまうから、後は興味があれば自分で本を探すしかない。たぶん、今でもそうだろう。ゆとり授業なんていっているのでは、なおさらかもしれない。1960年代、私たちの学生時代に、そんな教養としての昭和史の本といえば遠山茂樹らの『昭和史』(岩波新書)か、中央公論社版「日本の歴史」の大内力『ファシズムへの道』、林茂『太平洋戦争』だったと思う。どちらも左翼系の学者の手になるものであることが時代を感じさせる。

殊に岩波新書はこちこちの共産党系マルクス主義者の書いたものだから、当時、新左翼の末端にいた私が読んでも、その教条的な分析の臭さにへきえきしたものだ。中公版のほうは読みやすい文章でバランス感覚もあったけれど、「教養」としてはあまりに詳しすぎ、かえって歴史の流れを大づかみすることができなかつたような気がする。

その後、そうした「教養としての昭和史」というのに相応しい本は出たのだろうか。あまり記憶がない。自分の子供には、水木しげるの『昭和史』(全8巻)を読ませた。コミ

ックながら、片腕を失った戦争体験など水木しげるの個人史と昭和史を交錯させ、歴史を身近なものとして感じさせる力作だった(そういえば、手塚治虫の『アドルフに告ぐ』もあった)。

そもそも、その後、教養というものそれ自体が疑われ、国民共通の基礎知識などなくなってしまったのだから、コミックしか思い浮かばないのも当然かもしれない。いや、コミックこそが教養になったというべきか。

でも、敗戦から半世紀以上経ち、高度成長とバブル、その崩壊を経験した今でも、私たちはなお基本的に「戦後史の空間」に生きているのだから、その空間を生む元となった昭和前期の歴史は、私たちの生に直にかかわりあっている。そこに無知では、私たちはまたしても誤るかもしれない。

半藤一利の『昭和史』は、そんな「教養としての歴史」という古めかしい言葉の有効性を改めて感じさせる一冊だった。……といって、この本が時代遅れだといっているのではない。歴史をこんなふうに面白く語れる人は、今どき、そうはいない。

半藤一利といえば、『日本のいちばん長い日』『聖断』『ノモンハンの夏』など、太平洋戦争を素材にした作品で知られる。

そんな著者にふさわしく、陸軍と海軍の動き、互いに対立しながら戦争へ戦争へとなだれてゆく巨大な渦を中心に、それらに時に反対し、時にうまく乗っかる天皇と側近グループ、さらに国民を煽る新聞(世論)という4つの軸のからみあいとして、昭和史の開幕を告げる張作霖爆殺事件から敗戦までを描いてゆく。

その大胆な単純化が、歴史を大づかみに分かりやすく、読む者の頭のなかに入れてくれる。「ときに張り扇の講談調、ときに落語の人情噺調」と著者が「あとがき」で記すように、若い世代を相手に飽きさせないよう工夫した語りが本書の元になっていることも、面白さを生みだした理由のひとつだろう。

もちろん、そんな単純化と床屋政談からは抜け落ちてしまうものもある。陸軍、具体的にいえば参謀本部の服部卓四郎、辻政信という2人の参謀が悪役として主役を張り、対して海軍の米内光政、山本五十六、井上成美という将官が善玉役を振り当てられる(著者は、海軍も善玉ばかりではなかったと言っているが)。だから、ときに悪玉と善玉が対立するエンタテインメントのようになってしまう気味もなくはない。

さらに気になるのは、天皇が戦争に果たした役割についてだ。ひとことで言えば、この本は、昭和天皇は戦争を回避し、また戦争を終わらせるためによくやった、という立場に貫かれている。

著者は、張作霖爆殺事件で政治に口を出し、内閣をつぶしてしまった経験に懲りた昭和天皇は、以後、内閣が決めたことにNOを言わない立憲君主国の「機関」に徹したという。この本で著者はそれ以上のことは言っていないが、その立場を敷衍すれば、昭和天皇に戦争責任はなかった、ということになるのだろう。

でも、この本でも触れられているように2・26事件の際、側近を殺されて怒りにかられた天皇は「機関」であることを逸脱して主体的に行動しているし、戦争が始まってからも、折りに触れ積極的に発言していることは、いろいろな資料が明らかにしている。

そのように事実関係にもさまざまな議論があり、それを措いても、天皇の名において300万の日本人が死に、それに倍するアジアの民が死んだという事実は残る。法的な責任はともかく、道義的な責任は否定しようもないはずだ。

そうした議論が大切なのは、昭和天皇の戦争責任を云々するというより、戦後、そのことについて天皇がどのような態度を取ったかということこそが重要だと思うからだ。本人にその意志がなかったのかどうかはともかく、結果的に昭和天皇は戦争責任に一言も触れることがなかった。そのことが、「戦後史の空間」のあり方をいちばん底のところで規定しているのではないだろうか。

どこで読んだか忘れてしまったけれど、敗戦直後に天皇の側近が、天皇が自身の責任について一言も触れないですませては、長い目で見て日本人の精神を退廃させてしまうのではないかと心配した、という記述を読んだことがある。まっとうな考えだと思う。

いま、「戦後史の空間」の矛盾や空虚の象徴のように挙げられるのは憲法第9条だけれど、少なくとも憲法が制定された時点で、日本はアメリカに占領され、武力を持たない丸裸の状態だったから、その意味では、第9条は理想の表明であると同時に、当時の日本の現状を追認しただけという側面をも持っている。そこに現実と理念の乖離はなかった。

それ以上に「戦後史の空間」をいちばん深いところで規定したのは、昭和天皇が戦争責任について一言も語らずに生きのびたこと、またそれを許して、黙々と経済国家

としての再建に邁進したことによって、私たちの精神の奥深くにどうしようもないニヒリズムが巣くってしまったことではないかと思うのだ。著者の考え方では、そうした事柄に議論を展開する可能性を閉ざしてしまうのではないか、というのが私の感想。

思わず脇道に逸れてしまったけれど、そんなことを考えさせるだけの刺激と面白さを、『昭和史』は持っている。敗戦のとき15歳だった著者が、この時代の空気を吸って実際に肌で知っていることも、描写に実感の裏づけを与え、文章を説得力あるものになっている。

リベラリストの語ったこの歴史には、不満もあるけれど、それ以上に歴史から学ぶことの大切さを私たちに教えてくれる。こういう本が、新しい「教養」として、私たちの共通財産になってほしい。

著者は最後に、昭和史の教訓として5つのことを挙げている。

第1に、「国民的熱狂をつくってはいけない」。第2に、「危機において、日本人は抽象的な観念論を好み、具体的な方法論に目をつぶる」。第3に、「官僚的秀才による小集団エリート主義の弊害」。第4に、「国際社会のなかの日本の位置を客観的に把握しない」。第5に、「事が起こったとき、すぐに成果を求める対症療法的な発想を取る」。

近ごろのイラクでの日本人誘拐事件や、北朝鮮の拉致事件を巡っての政治家の言動、マスコミの報道、国民の過敏な反応を見ていると、否応なく著者の挙げた5項目が頭に浮かんでくる。いやな国になってきたなあ、という苦い思いは私ひとりだけのもの

のではないはずだ。

それにしても昭和史というのは、読んでいて陰々滅々としてくる。『竜馬がゆく』や『坂の上の雲』で近代国家の夜明けと勃興期を書いた司馬遼太郎が、ノモンハンを素材に昭和史を書こうとして遂に書くことを断念した事情が、よく分かる。

著者は、『昭和史』の最後の一文をこう結んでいる。「それにしても何とアホな戦争をしたものか」。(雄)

半藤一利の「昭和史」を読んで

この書は半藤さんが編集者の山本明子さんに執拗に説得されて「昭和のシの字も知らない人たちのために、手ほどきの授業を…」というわけで、録音スタッフと一緒に半藤さんの話を聞き、それを単行本として発刊したものである。だから、学者や研究者の様な難しい言葉は出てこなく、とても読みやすくなっている。「昭和史」(1926-1945年)と「昭和史・戦後編」(1945-1989年)の2冊、1000ページ余りで構成されている。

内容を簡単に要約してみた。

ペルリが来て1865年日本は「開国」した。それから3年後の明治元年から世界の国々に負けない国づくりが始まり、無理を承知で背伸びしながらも国家建設を懸命に進め、なんとか近代国家をつくることに成功した。明治の日本の人たちが、とにかく一人前のしっかりした国をつくろうと頑張った成果の表れとして、明治27年、28年(1894、1895年)の「眠れる獅子」といわれたアジア随一の強国清国(日清戦争)に勝ち、さらに明治37年、38年(1904、1905年)世界の五大強国の一つといわれた帝政ロシアとの戦争(日露戦争)にかろうじて勝つことができた。そして世界の国々からもアジアの中の日本という国を認めてもらえるようになった。つまり国を開いてからちょうど40年間かかって、日本は近代国家を完成させた。そして、その国をちょうど40年後の1945年にまた滅ぼしてしまう。

日本は日露戦争に勝って、ロシアが持っていた満州の権利を全部肩代わりした。ひとつが関東州、つまり遼東半島の殆ど全部を清国から借り受けて自由に使える権利をもらった。さらに南満州鉄道の安東から奉天までの経営権も貰う。

獲得した鉄道の安全を守るために軍隊を置くことになり、のちの関東州の旅順、大連に駐屯した隊に司令部を置くようになって「関東軍」と呼ばれるようになり、次第に増やす方策をとるようになっていく。

資源の乏しい日本は資源供給地として満州を注目するが、鉄や石炭はたくさんあったが石油はなかった。また、人口がどんどん増えて問題が起こっていた狭い日本には、人交流先として満州が重要視される。

このような大きな役割を持つ満州を、日露戦争に勝ったことによって日本は手に入れ、明治の終わり以降、これをどうやって経営してゆくかが政治の中心課題になってゆくのである。

それと並行して、日本で学んだこともある孫文や蒋介石ら有能な軍人による辛亥革命が起き、中華民国という新しい国が出来上がることになる。

ヨーロッパで第一次世界大戦が始まっていたどさくさに紛れて、日本は南満州鉄道や

関東州の租借その他、すべての特殊権益の期限を 100 年くらい伸ばす「対華二十一カ条の要求」を無理やり認めさせた。そこから日本に対する反感が大きくなってゆく。中国の大軍閥の親玉が乗った汽車を日本軍が爆破して暗殺した「張作霖爆殺事件」をうやむやにした頃から日本の破滅の道が始まる。

陸軍中佐・石原莞爾の「世界最終戦争論」という大構想により、国力と戦力を蓄えてゆく方向に向かってゆく日本。その石原莞爾が関東軍の作戦参謀として旅順に赴任する。それからは「満州をどうすべきか」次から次へと作戦構想が東京の参謀本部に届くことになる。さらに石原莞爾は「張作霖爆殺事件」でのマスコミの反発を反省し、今度何かやる時はマスコミを上手く使おう、というマスコミ対策も始める。

そうした中、関東軍の陰謀による柳条湖事件が起こる。これを日本の新聞は「奉天軍(中国)の計画的行動」と関東軍擁護にまわった。新聞がいつせいに太鼓をたたき始めラジオが臨時ニュースを流し、どんどん読者や国民を煽ってゆくことになり、満州ではぐんぐん戦争が遂行されてゆく。

五・一五事件で完全に息の根を止められてしまった政党政治に変わり、軍人の暴力が政治や言動の上に君臨する「恐怖時代」が始まるのである。

国際連盟から脱退して孤立の道を書くことになるのだが、「日本が連名で孤立しているというのなら連盟の外にいても同じ孤立ではないか、憐れみを乞うようなことはするな、いい加減にしろ」これが毎日新聞(当時は東京日日新聞)の記事だ。

これ以降、軍国主義への道が整備されてゆく。さらに、昭和 11 年 2 月 26 日に岡田啓介首相らを襲撃する二・二六事件が勃発する。これ以降の日本は二・二六の再発(テロ)をちらつかせて、政・財・言論界を脅迫し、軍需産業を抱きかかえ、国民をひきずり戦争体制へ大股で歩き出した。

盧溝橋事件、上海事変をへて中国共産軍と日本軍が戦う全面戦争になってゆくが、これに国民は狂喜し、日本中で「勝った、勝った」の提灯行列が行われた。

深まってゆく戦争の中でも、ドイツ大使による和平への道もあったのだが、当時の近衛文麿首相は(日本新党を結成した細川護熙元総理の祖父)は、中国が飲むわけもない要求「勝ったのだから賠償を寄越せ」などと言いだし、軍部顔負けの強硬さで関東軍の戦意を復活せしめた。

ワシントン軍縮会議から離脱し、孤立した日本はアメリカから船や戦車をつくる鉄屑や軍艦や飛行機の燃料となる石油を輸入していたが、全面輸出禁止になってしまった。海軍の将校は「まさかアメリカがそこまでするとは思ってもみなかった」と危機管理意識のないことを言っているのには驚くばかりだ。

ノモンハン事件という国境紛争がソ連との大戦争になって凄惨な戦いになっていった。日本は軍の 30%以上の死傷者を出し壊滅的な大損害を受けるのである。この反省をもとに低水準にあった火力戦能力を向上することになっていったが、その火力戦能力の向上が図られないまま、2 年半後に太平洋戦争に突入していくのである。

12月8日、「ニイタカヤマノボレ 一〇八」山本連合艦隊司令長官の命令が出て真珠湾攻撃が始まるが、「開戦通告」は外務省の怠慢と無神経が災いし、結果的に1時間遅れという「だまし討ち」という破廉恥な事態になった。

真珠湾の勝利から束の間の「連勝」があり、ひたすら日本国民は大勝利に酔ってしまう。しかし、栄光から悲惨への逆転はあまりにも早く来た。

昭和17年6月5日、日本の空母4隻対アメリカ空母3隻の戦いとなったミッドウェー海戦は、アメリカの奇襲攻撃を受けて南雲中佐率いる日本の4隻が全滅し多数の戦死者が出た。ところがこのミッドウェーでの大敗は一切公表されなかった。続いてガダルカナル、インパール、サイパンなどの悲劇から特攻隊出撃へとなだれ込んでいくのである。

日本全土への空爆、そして、広島と長崎の原子爆弾によって「ポツダム宣言」を受諾し終戦となった。

約500ページに及ぶ半藤さんの「昭和史」はここまでで、これ以降は「戦後篇」になる。日中戦争から太平洋戦争まで沖縄や本土の非戦闘員や南の島や海で空しく散っていった人たちは310万人ともいわれている。特攻の作戦での死者は陸軍、海軍あわせて4615人にもものぼる。

半藤さんは「これだけの死者が20年の昭和史の結論です」と言っている。

さらに、「むすびの章」では次のように語りかけている。

よく「歴史に学べ」といわれます。きちんと読めば、歴史は将来に大変大きな教訓を投げかけてくれます。反省の材料を提供してくれるし、あるいは日本人の精神構造の欠点もまたしっかりと示してくれます。同じような過ちを繰り返させまいということが学べるわけです。ただしそれは、私たちが「それを正しく、きちんと学べば」という条件付きのもとです。その意思がなければ、歴史はほとんど何も語ってくれません。

この書には半藤さんの感情も多少は入っているが、自分やその家族、知人が体験した歴史ではそうなくても不思議ではない。私達の年代は学校では昭和史を学ぶことは殆どなかった。私達が学んだ歴史には人物が登場しなかった。この「昭和史」には、誰がどのようにかわり、その結果としてどのように動いたのかが書かれている。歴史は人間の英知や愚昧、勇気と卑劣、善意と野心のすべてが書き込まれてはじめて多様で面白い物語になってゆく。

半藤一利さんの「昭和史―戦後篇」を読んで

半藤一利さんの「昭和史」は昭和の初期から 1945 年の終戦までで終わっている。しかし、昭和もその後 1989 年まで続くわけでこれだけで昭和史を終えてはいけないと、編集者の山本明子さんらにまでもや執拗に要望され、半藤さんは「戦後篇」を語ることになった。

8 月 20 日に灯火管制が解除され電燈や窓を覆っていた黒い遮蔽幕は取り除かれ、建物から外に光が洩れパァーッと明るくなった頃から人々の気持ちが落ち着いてきていたが、同時に不安も満ちていた。

戦いに敗れ「鬼畜米英」と憎悪を抱くように喧伝された日本人の前に、連合軍の最高司令長官マッカーサーが丸腰にサングラス、コーンパイプを手にしてゆうゆうとタラップを降り立ったのは 8 月 30 日厚木飛行場だった。それから GHQ による占領政策が始まる。

戦後篇の前半は GHQ による占領期の日本が奔馬の如く勢いよく、こまごまと語られている。戦後日本の基本的な骨組みが形成された時代である。

財閥の解体、農地改革、労働改革など戦後日本の基本的な改革となった占領政策を GHQ は無策の日本政府にどんどん押しつけてゆく。選挙制度や教育改革、言論および新聞の自由なども同様に…。

GHQ の最大の目的は、日本から軍国主義、国家主義的なものを徹底的になくすことで、参謀本部は廃止され、陸海軍の解体司令に続き、主要戦犯 39 人が逮捕される。

闇市が大繁盛するなか飢餓はきわまり、精神を喪失しかけた日本人に僅かなあかりを灯したのは並木路子の「リンゴの唄」だった。

♪～赤いリンゴに口びるよせて～♪

白熱した憲法草案論議も GHQ 憲法草案を受け入れ、「象徴天皇」でおさまり、「戦争の放棄」という世界で初めての憲法が制定された。

世界情勢が激変し、やがて冷戦がはじまったころ、昭和 21 年 5 月 3 日に「東京裁判」が始まる。

昭和 22 年 4 月の総選挙で与党の吉田茂が率いる自由党は 143 議席をとって第 1 党となった社会党に敗れる。吉田茂は総辞職し潔く社会党の片山哲に政権を渡すのだが、この内閣もわずか 9 カ月足らずで総辞職に追い込まれ、そして再び吉田内閣が登場する。それから昭和 29 年まで長期政権になる。

吉田茂は軽武装と経済復興に主眼を置いた政策を推し進めるが、憲法を改正

して再軍備し昔ながらの国家を作ろうと思ってる人たちもいた。その御大将が公職追放を解除された鳩山一郎で、石橋湛山、三木武夫らも政界に戻ってくる。鳩山一郎は自由党ができたときの総裁で、当然、総理大臣になれるはずだったが、追放が決まって復帰するまで吉田茂に譲った経緯がある。追放解除で出てきた鳩山は脳溢血で倒れるが、鳩山派は吉田に「政権を寄越せ」と迫るが、吉田は突っぱねる。

昭和 28 年の「バカヤロー」解散の後、自由党は分派とまっぴたつに割れ、保守は改進黨との三つに分かれていた。そして自由党内の鳩山派、改進黨と日本自由党が吉田打倒のため合同し、日本民主党が成立する。そこには A 級戦犯から解放されて密かに身を沈めていた岸信介も含まれていた。その後のゴタゴタを経て吉田茂は総裁を降りる。

昭和 30 年 2 月の総選挙の結果、民主党 185 人、自由党 112 人、左派社会党 89 人、右派社会党 67 人ほか労働党 4 人、共産党 2 人という勢力分布になる。社会主義勢力に脅威を感じるとともに「吉田を追いおとした」という保守の仲間意識と憲法改正に必要な三分の二が欲しい鳩山は「保守合同」を画策し、1955 年自由民主党として成立する。社会党は落ちさらばえて名もなくなったが、この時は自由民主党と社会党という 2 大政党という構図になっていた。これが平成 5 年まで続く「五十五年体制」である。

しかし、鳩山内閣が目指した憲法改正と再軍備は手が届かずに終わるが、日ソ国交回復は調印まで漕ぎ着けた。

準 A 級戦犯として巣鴨にいて GHQ の政策変更で岸信介は、A 級戦犯 7 人が処刑された翌日、昭和 23 年 12 月 24 日巣鴨を出所する。だが公職追放されてすぐには復帰できず追放解除まで待ち、28 年の総選挙で政界復帰を果たした彼が、昭和 33 年総理大臣になる。岸信介はアメリカに押しつけられた安保条約の不平等の改正に心血を注ぐ。

岸内閣が安保推進を目指し、治安の締め付けのため警職法を出したため、世の中がギスギスしていた時、「ミッチーブーム」が起こる。皇太子殿下のお妃に、皇后になるために生まれたような清楚で美人の正田美智子さんが登場し日本中を沸かせた。

その 2 年後、安保闘争で騒然とする中、安保条約が成立する。安保条約の日米の批准書が交換された直後岸信介は退陣を表明する。

デモデモデモに明け暮れた岸内閣の後には、所得倍増論の池田勇人内閣。そして、東京オリンピックと新幹線。

ガンを患っていた池田総理は総辞職し、佐藤内閣が成立する。佐藤栄作は「沖縄が祖国復帰しないかぎり、戦後は終わっていない」と沖縄の返還に情熱を傾ける。

ビートルズの来日、ベトナム戦争、中国の文化大革命などの世界情勢の中で日本では公害問題や環境問題が表面化していた。水俣病が公害と認定されたのは昭和43年で、今年ようやくその解決に目処が立った。

大学が産業界や経済界と結びつくようになって「産学協同反対」運動が起こり、「授業料値上げ反対」運動が連鎖し「全学共闘会議」（全共闘）が組織され、激しい学生運動になってゆき、東大・安田講堂の落城、浅間山荘事件で騒乱は終わる。

昭和45年の万国博覧会は万博史上最高の6421万8770人の入場者を記録。

作家の三島由紀夫が「楯の会」のメンバー4人とともに自衛隊市ヶ谷駐屯地の総監室に乗り込み大演説をぶったのもこの年だった。三島は「憲法改正・天皇親政の復活」を訴えるが、賛同者もなく割腹自殺を計る。

そして翌昭和46年沖縄が返還され、終戦が完結した。

その後の内閣

田中角栄・三木武夫・福田赳夫・大平正芳・鈴木善幸・中曽根康弘・竹下登・宇野宗佑・海部俊樹と続き昭和が終わる。